大正・昭和前期の舞踊教育
—— 戸倉ハルとその時代 ——

松 本 千代栄
岡 野 理 子

は じ め に

戸倉ハルは、昭和8年より東京女子高等師範学校（後、お茶の水女子大学）にあって、学校ダンスの推進者となり、変動の時代には要目委員としてダンスの教育的価値を主張し、これを守り続けながら、昭和前期の舞踊教育における中心的役割を果たしてきた。

桐生は永井、二階堂、倉橋、土川の流れの中に戸倉を位置づけ、また三浦ヒロとは異なる独自のダンス観——すなわち「ダンスはあくまで学校教育、全人教育の一環であり、学校では体育としてのダンス教育の基礎づくりに重点を置くべき」という信念の下で指導や作品創作がなされていたことを指摘している。またその作風は、日本的様相をもち、「女性としての感性とか優美さ、謙虚さ」と根底としていたと説明されている。

本論では、戸倉独自の作風やその背景にある独自のダンス観、ダンス指導観をさらに詳しく捉えることを目的に、戸倉の舞踊発想を検討し、それと関連して戸倉作品のどのような舞踊表現特性をもっているかをみ、同時に、それはがどのような形で指導されたかについても考察していく。

対象作品は、作品分析97作品、指導法分析33作品である（詳細は資料1，2参照）。

（1）舞踊発想について

戸倉の舞踊発想をまず歌曲を対象にみると
「詩の心、曲の想を背景として、動作がそれを

(1) 松本千代栄・岡野理子・中野祐子「大正・昭和前期の舞踊教育（Ⅱ）戸倉ハルとその時代 —— 第14回舞踊学会発表 昭57 舞踊学6号，昭58，p.33-34.
松本千代栄・岡野理子「大正・昭和前期の舞踊教育 —— 戸倉ハルとその時代 —— その2）第18回舞踊学会発表 昭59。
(2) 桐生敬子「学校ダンスの普及者 戸倉ハル」p.239 262，女性体育史研究会編「近代日本女性体育史 —— 女性体育のバイオグラフィー —— 」日本体育社，昭56，引用はp.256，257。
(3) 指導法分析番号25（資料1，2参照，以下同じ）「菊」p.48。
(4) 作品分析番号71「延命草幻想曲」p.45。
(5) 作品分析番号44「田梅の月」p.23。
(6) 戸倉ハル「若人の胸に美しい美しい旋律」p.25。
(7) 指導法分析番号26「鬼ごっこ」p.9。
(8) 作品分析番号69「乙女の祈り」p.26。

—17—
それによき加え、幼児・小学生を対象にした作品では、
「活気に満ちたものは持っている曲(9)」
「明るい優雅な曲を(10)」
「全曲を通じて明るい想(11)」
などと「軽快さ」「明るさ」を、中・高校生を対象にした作品では、
「全曲を通して感傷的で(12)」
「この詩情ゆたかな思い出、中田喜直氏の作曲によって更に倍加され、美しいとも哀しみこの歌(13)」
などと「哀調」を帯びた曲を選んで、発達的な区別をつけている。
このような発達に応じるとらえ方について戸倉の舞踊発想を更に詳しく見ていくことで考察を進めてみたい。
戸倉は、幼・小では、「子供の経験をいかし、最も自然的に行わせる(14)という作舞姿勢を保ち、特に、低学年までは、創作を中心にして、これを強調している。
「創作」については、後に指導法の項で詳述するが、「子供の豊かな創造力を巧みに表現させ(15)るものの、それらは、
「大事なことは曲に合っていること(16)」
「創作に必要なやさしい姿と、人になって可愛らしむところ(17)」
などのように、やはり、戸倉自身の舞踊発想に基づくものを使っている。
それは、
「流麗な曲に合わせて無邪気にしかも快活に(18)」
「全体を一貫した気持、『汽車にのった愉快さ』『新しいものを追う心情』『元気をみちた爽快さで』七五調の軽快なリズムを持って
いる詩(19)」
などのように明るく、動的な面を基調としている。その上で、低・中学年では、「面白く(20)」「愉
快に(21)」「無邪気に(22)」などが主であるものに対し、高学年で、「静かな気持(23)」というように静
的観念が付加されてくるようになる。
しかし先に見た「鶴」のように、やさしい姿と、人になつて可愛らしいところ」をとらえ、
あるいは「人格視せられた小川の流れが、あたかも波をしているように(24)」感じ、これらは、戸倉が、自然や動物を「同情の心情(25)」をもって観
察していったことを示し、発達をこめて戸倉の舞踊
発想の根拠を成していたように思われる。

中學・高校になると、その発想は、
「大空に独り秋思を湛えてたてる銀杏も散り
果てて、叢にすぎずの虫の音も、次第に細り、
今度錦鶴を飼った秋は、いよいよ深さを発して
ゆく。月影も寒く、時雨れた夜、簾に秋のあは
れをこめた白菊は、ほほ良い月の光を帯びて
灰かに香り、しとどに濡れる揺んでいるを僅
かに、ふと静かに露に照らし日の月影、は
ろはると地に落ちる。その色の満らぬ事
は何と気高く見ることよ。
朝までかおき錦もぬけず、吹く木枯にゆら
ぎながら色でもすかすかす、満月蒼條の中
に只孤斎郁郁として咲き空姿の遂々し。
美しさ。
あらゆる試練に耐えたこの花の風情よ。年毎
にめぐり来る晚秋に、昔も今も人の心を強く
引く白菊よ、お、この白菊(26)」
というように、より一層のふくらみをもって説明
されている。
そこで使用されている言葉には、「夢(27)」「あこ
がれ(28)」などのように「感想的(29)」で、「ロマン
ティックな感じ(30)」を持つものが多くある。
「岩に砕ける波や、川岸にささぐく小弁、さ
は悠然たる流れなど、幾千年の喜びや悲し
みをひめて静かに流れている情景をみるかの
様に思わせる(31)」
「月の美しい夜には、波の濁い銀に輝き、
わが世の春はばかりに乱舞し、また、ひこか
に語り合い、闘め苦しみかに見える。こう考
えてみると、命なき水も、血の通る生物の知
く身近に感じることさえ出来る(32)」
などのように、「波」や「さくら」や「菊」など
の自然に託した「同情の気持」は、幼・小よりさ
らに深い観念となって、その舞踊発想を形成して

(9) 指導法分析番号27「子とろ」p.18
(10) " " 28「春の小川」p.34.
(11) " " 22「シーソー」p.34.
(12) 作品分析番号77「花の歌」p.101.
(13) " " 75「雪の降る町」p.80.
(14) 指導法分析番号6「かたつむり」p.29.
(15) " " 20「私のまね」p.30.
(16) " " 22「シーソー」p.35.
(17) " " 5「鶴」p.31〜32.
(18) " " 13「仲よし」p.33.
(19) " " 23「汽車」p.35〜36.
(20) 作品分析番号17「くりおめめ」p.15.
" 18「まるびるま」p.19.
(21) " " 19「のぼると見えた」p.23.
(22) 作品分析番号21「富士の雪帽子」p.33.
(" " 22「おひなまわり」p.39.
(23) " " 37「うすづき」p.109.
(24) " " 38「月夜笛」p.114.
(25) " " 39「こころの蛙」p.120.
(26) 指導法分析番号28「春の小川」p.34.
(27) 作品分析番号16「すずめ」p.8.
(28) 指導法分析番号25「菊」p.46.
(29) 作品分析番号70「月の砂漠」.
(30) " " 69「乙女の誓い」.
(31) 作品分析番号77「花の歌」.
(32) " " 70「月の砂漠」.
(33) " " 80「美しい夜青きドウナ」p.135.
(34) " " 66「銀波」p.51.

-18-
いる。
この一篇の詩を流れる主題感情は栄枯盛衰の世の姿を表わしたものである。春たけなわ
夜明てもあやたもかれさして花をたたえ、
ゆく春をおしむ世の泰平の姿を玉環にうつし
た月影は今いくつ。かつては陣営におく霜
さざく数行の過従にしばしのあれをされもそ
れの月は植るつぎに植りつつその淒さを
はこったのに今は空しく且つ共の面影をしの
ふばかりである。
荒廃した古城は去りし日の歿衰の夢のあとと更
なく只黙々として聞えるものは松嶺のひぐ
きのみである。
月は古今てらって今もなお変らずとい荒
城の月は世の姿をうつさんとたかばは嘘々
とおりはえている。
『国破れて山河あり』にして草木深し」と
賦し或は『夏草やつものどもが夢のあと』
とった人々の感慨も共にこの詩の心であろう(38)
に詳しく示されるように、淡いロマンや感嘆にと
どまらず、史観、史実とかきなあわせて日本的観
想、詩情としての「もののあわれ」に深めている
とみることができる(39)
そうした感歎的な気分や無常感を持った作品の
中には、
「落花のうとのあわびしかも、ひるがえって静
かに思えば、緑の葉陰に結ばれる希望にみち
た実を、うれしく迎えるのである(39)「
「若い人の心をゆぶりながら、なお将来に
新しい希望をたたまでている(38)」
などのように、明るい希望をもって結ばれている
ものが幾つか見られ、ここに教育者としての戸戸
の潜在的な姿勢が現していると見ることができる。
また、教育的価値の重視は、「緑がつ団体的に
表現されていることを認識させる(37)」と集団の表
現を基調にもち、協同的動作に習熟せしめる。
協同の精神を養う(38)などと、時代と教育精神を
反映した舞踊発想として表われている。

(2) 舞踊表現特性について

幼児・小児の作品については、その全作品にお
いて、イメージと動きが明確に提示されている。
その多くは、「お人形を抱いた様子(40)」「餌を
飼に投げ与えた様子をする(40)」などのように模徴
的動作である。
特にイメージは記されていないが、動きの中で
も、「目ははっちとり」とで「掌を軽く握って、左
手を眼の前に取り、次に右手を右眼の前に取
る。両手の掌をバツと開く(41)
「一つ二つ」で「二番生は両手を前に出して
展げる。其の間に一番生は二番生の数えるのに
を指す(42)
などが見られ、ここでも模徴的な動作の傾向があ
われている。
またこのような指をさせて何かを示すという動
きは、他にも、
「左差指で右の屋根を指し(43)
「左手を斜前方にあげ、人差指で遠か彼方
の宮宮の指を指す様をとる(44)
などがあり、その表現的性格の中に日常動作的な
客観性をとどめている。
模徴的な動きが多く見られる一方に、
「右足を側に出すと同時に両手を体前に取り、
手首を前後に振りながら体と手とを左右に動
かし、あたかも小川が静かに流れている心持
を表わす(43)
「右手を側にして左手指を上に上げ、右空を眺
めながら徐らに四段におろして夕日の静かに
沈んでゆく様を表わす(44)
などのように感情的に高められた「間接表現」が
見出される。
特に「シャボン玉」の「こわれて消えた」の歌
詞で、「消え」と「た」にわけ、前者で、「前の
動作から五指をバツと開き」、後者で、「右足を
元にして、両手を下におろすと同時に体をか
めて、シャボン玉の消え失って失望した感じを表
わす」よう振付けられ(45)、短い歌詞の中に簡単に
振りで深い感情をこめているという点で特色がある。
あるいは
「体前で軽く拍手しながら、鳥の飛び行く方
向を見送る様子を示す(46)
「体前で軽く拍手しながらホッピで右へ一週
し、轟の降る様を見て喜ぶ様を表わす(47)
「全体手をつなぎ、左足を前に出して両手を

[33] 戸戸 вал "形式から内容へ" 女子と子供の体育3
巻1号、昭13.1、p.11～12「荒城の月」
[34] 他に「青葉の笛」「夢の郡」「芽」「銀波」「花
のすがた」などがある。
[35] 作品分析番号61「花のすがた」p.259。
[36] " 75「雪の降る町を」p.80。
[37] 指導法分析番号21「嵐月夜」p.52。
[38] " 22「シーソー」p.34。
[39] 作品分析番号1「人形」p.2。
[40] " 3「池の鯉」p.13。
軽く前後に振り、のどかに気持を表わす[50] などのように、簡単であるがリズミカルな振りの中に快く、また、心をこめて踊ることができるよう振付けられている。

心をこめて踊ることができるように — その具体的な流れとして、戸倉は、視線を大切にした。

「はるかの右の空を眺める[51]」「夕焼けの空を眺める[52]」「シャボン玉の行くへを眺める[53]」

などは、それを示すものである。

この視線については、中・高でも、両手をかかせて、それに目を注ぎながら[54]「右の方を見ながら[55]」「視線を右に移す[56]」「視線を残したまま[57]」などの記述が多い。

幼・小が具体的に見る対象を示していたのに対し、より技術化しているという相違はあるものの、視線にあらわれる表情性への志向は、年齢や時代をこえて一貫した表現特性と言える。

戸倉は、こうした視線の重要さを、「『目は心の窓です。上を見れば嬉しさを、下を見ればうれしい。中間は平和な気持を……』と視線のおき方に注意された（略）こうして個性的な表現をさせることにきびしかった[58]」と、二階堂トクヨから学んだと述べている。そして戸倉もまた、「『ここところでどどど』ということをことばでなく、踊ることで教え（略）視線をだいじにし、ここをつないで踊らなくてはならない」と教えている。

こうした視線の中で特に多く使われているものに、中・高では、「肩ごしにうろいろを見る[59]」「右肩ごしに下を見る[60]」がある。

また、「右手を胸の前につける[61]」「肘をまげて胸につける[62]」「右腕を静かに左胸にとする[63]」なども記載[1]などは、戸倉が好んで用いているポーズや動きであり、これら内部的な体幹による表現技術の中に、戸倉作品の舞踊表現特性をみるとことができるようにと思われる。（資料3－1参照）

第1報で述べたように、戸倉の幼・小を対象とした初期作品では、脇間がほとんど変化せず、腕（手）や顔の向きなどによって主に表情がつくられていた。（資料3－2参照）

昭和11年に戸倉は、基本姿勢として、（1）脇の態勢、（2）足の態勢、（3）応用態勢を示し、バレエの技術を導入している[64]

この年の学校体操授業要目に示された歌唱選曲（戸倉が作成）について伊沢は、「歌詞の表現よりも運動に重点を置かれた事は注目すべき所」と評している[65]

これらは時代が要求した一つの転換であったのだろうとも思われるが、これまでの静的で模倣的な表現技術の中に、躍動的、よりリズミカルな技術を加えたことで、動きの幅がひろがった時期と言えることができるように思われる。

このような時代的な変化も考慮に入れておかなければならないが、中・高の作品では、重ね図にみられるように、動きの可動性は、幼・小より高いものとなっている。（資料3－2参照）

しかしこれらは、引みずれなどを含まない、常に重心が体の中心に保たれているような優美な美しさを、発達や時代をこえて、一貫して持っている。戸倉が図にみられるように、クロワゼ・デリエールやエッフェー・デリエールのようなエポックマンの姿勢を好んで用いたことは、それを明白に示すものであろう。（資料3－1参照）
この指導精神の中で、
「菊の花の表現を出来るだけ優美に行わせると[66]」
「軽快優美な動作で[67]」
と述べているこの「優美さ」に戸倉作品の一つの表現特性をみることができ、具体的には先のような技術がその現れとなっていたのだろう。

戸倉は、「各教材にはそれぞれ適応した作曲があっ
て飛ぶ動作には軽い曲があり、静かなるところはな
だらかに流れていく曲がある。それを外の曲を用

(50) 作品分析番号10「プランコ」p.47.
(51) 8「どこかで春が」p.36.
(52) 11「夕日」p.52.
(53) 13「シャボン玉」p.63.
(54) 45「ポピー」p.34.
(55) 57「みのり」p.37.
(56) 68「浜千鳥」p.23.
(57) 同上 p.24.
(58) 二階堂清次・戸倉ハル・二階堂真寿「女子体育の
母・二階堂トクヨ伝」不味堂、昭32.4、p.59.
(59) 奥水はる「戸倉先生の授業」日本女子体育連盟
監修、「戸倉ハルダンス作品集」のうち、日本コロ
ムビビ、昭44.7、p.9.
(60) 作品分析番号68「浜千鳥」p.24.
(61) 69「乙女の祈り」p.27, 28. 他に「月
の砂漠」「宵待草幻想曲」「別れのワルツ」「花のす
かた」「荒城の月幻想」「青葉の笛」「雪の降る町を」
「美しく過ぎドナル」「も同様」.
(62) 73「別れのワルツ」p.64.
(63) 78「さくら奏曲」p.114.
(64) 61「花のすかた」p.262.
(65) 指導法分析番号7.
(66) 伊沢エイ『小学校歌唱・行進運動』（現代学校体
育全集小学校体育篇第7巻）成美堂書店、昭11.12, 
p.38.
(67) 指導法分析番号8「菊」p.17.
(68) 28「春の小川」p.34.
（3）舞踊発想と作舞の傾性について

作品例①「雪」は、第二節にこの詩の生命があるとして、「空いっぱいに花びらのように散ってくる雪の美しさで、活動的なところに一種の魅力を感ずる」と写戸が解説している。この部分に着目して、昭和2年、11年に振付けられた二つを比較してみる。

昭和2年のもとは,
「ふってはふってはずんずんもる」で「右足を後ろに引き、両手を上げて軽く手首を動かしながら下におろし、膝を屈げて跪き、雪のチラリ降る様子を示す。前の振りの動作から両手を前に出しのべ、立ち上がり同時にダンダン両手を上げて側下におろす」という動きになっており、簡潔な、あまり変動のない動きで、この詩の特徴やよく生かした振付けがされている。

昭和11年になると、この部分はスキップングステップによって表わされ、より躍動的なものとなっている。指導精神に「軽い踏躍の動作に依って軽快な動作の訓練」とあるように、当時の時代性を反映したものとも考えられるが、前出の「活動的なところに一種の魅力を感ずる」とする戸倉の詩歌への感受性によって、前期のものとは違った味わいのある作品となっている。

「雪」は低学年を対象としているが、作品例②の「臥月夜」は、高学年（尋5・6）を対象としている。

「この曲の頂点」である第三段の振りをみると、「互いに手をつなぎ、右上方に揺めながら軽く前後にふる」。

「たがいに手をつかないでくるひざを屈伸し
ながら、両手を前後にふる」と同様の振りになっている。

これは「ゆるやかな波の変容」をもつ音楽の特徴を、また「何に吹くともない」音をうけて空を眺めると、夕日に中空にすでに淡い夕月が遠い昔の夢のようにかかっている」という詩の心を生かした振付けと言える。

この部分について当時の講習会受講生黒川は、「自分の手が、その揺れ方が、音楽をあらわすと思えば、全身心のやさしさがここに尽きても、努めずにいられなかった」と述べている。

簡単な振り、言い換えれば誰でも動けるような振りの中にいかに思いをこめていくかということを大切にして戸倉の作品は創られていることが、ここでもうかがわれる。

それは、「そのものの様子を端的にあらわすとともに、その動きを大きくして（略）何時、どこでも繰り返したくなるような楽しかさをねらって」、「詩の心と曲の想を生かして、リズムに重点をおき、一刀彫のような、単純で技巧のないもので、あやかも、子供の生活の中にすぐにそこでふるうように」という戸倉の作舞姿勢からきている。

このように、あるいは「荒城の月」が、「荒城の月変奏曲」「荒城の月にて」「荒城の月幻想」と数回にわたって改訂されているように、戸倉は、1つの題材を新たな視点で何度でも振付けている。それは戸倉の作品に対する取組みの深さと舞踊発想の豊かさを如実に示すものであろう。

しかし曲の頂点となる部分は、改作されてその振付けはほとんど変化していない。それは、単純に純化された技術の中に深い思いをこめて踊ることができるように創られている。ここにも戸倉の普遍的な舞踊表現特性をみることができるようと思われる。

（4）指導観について

さてこれらの作品がどのように教えられたか、その指導観をみていくことにする。（資料4参照）

資料2でみられるように対象の年齢が低くなるほど、解釈の内容は細かくなっている。

具体的にこれを見ていくと、「花」は、低学年の創作指導として行われているもので、教師の

(69) 戸倉ハル「唱謡遊戯及び行進遊戯教授上の注意」女子子供の体育1巻6号、昭11.9、p.6～7。
(70) 指導法分析番号21「臥月夜」p.52。
(71) 指導法分析番号19、p.30。
(72) 作品分析番号5、p.20。
(73) 指導法分析番号19、p.31。
(74) 作品分析番号40、p.37。
(75) 戸倉ハル『学校のダンス』ポプラ社、昭36、p.110。
(76) 指導法分析番号21、p.52。
(77) 21、p.50。
(78) 昭和11年頃、石黒ミナ「共にあゆんだ幾星霜 — 古い弟子の回想記」女子体育4巻9号、昭37.9、p.55。
(79) 戸倉ハル・小林つや江『うたとあそび第2集』不味堂、昭33.6、まえがき。
(80) 戸倉ハル・小林つや江『保育資料うたとあそび』不味堂、昭31.6、序。

-21-
問いかけ（皆さんが何の花が好きですか）、状況設定（播種から生長までを面白く話す）、賞賛（何と綺麗なお花でしょう）など巧みな誘導によって、児童の自由表現の様子が詳細に展開されている。

指導例文2(2)「案山子」をみると、ここでもやはり始めは児童の自由表現から入っている。しかしそれはやがて「更にいろいろな問題に依り動作の誘導に努め、児童の表現を正しくして次の動作をする」ように導かれていく。最終的には戸倉作品にまとめられている。

これは「水すべり」の中でも同様にみられる指導展開である。

このような自由表現、創作指導は、指導例文3「海」や同4「菊」などにみられるように、学年が上になるほど次第に減少し、基本練習重視の指導となる。

町八戸は、「形式から内容へ」と題して次のようについている。

「唱歌、行進遊戯は運動的効果の外に情操陶冶が加わりているのであるから只形式的陶冶ばかりでは片手落ちの感がある。（略）形式、内容を併せ両立させ次ねならば（略）形式的陶冶も勿論のゆえに出来ないが更に更に内容の吟味にまで進んでいかなければならぬと思う（略）内容の吟味とはその教材の指導精神及び歌曲の内容で、形式の面においてその内容に含まれている步法、態勢、その他の動作を指す[82]）。

また、「唱歌、行進遊戯の指導に就いて」で、

「興味中心と学習中心」にふれ、「小学校の低学年には興味中心の取扱いをなし、稍々進んでは両者の折衷で行き、更に高学年に進むにつれて学習中心で行うことが最も適当かと思うかと考える[82]）」と記している。

幼児・児童の自発性を尊重し、内発的な表現への動機づけを常に行った指導として、幼児・児童の主体性を大切にする指導観がここに認められる。それは昭和10年度という時代的背景を考えあわせると、より大きな意味をもつものと思われる。しかし創作の余地を残しながら、それらはつまり、作品へ至る階層としての限界をもつとみなしてならない。ここに今日でいうところの創作学習との差異点があると考えられる。

(5) 戸倉ハルとその時代

ここでは時代とその思想的背景を概観することで、戸倉のダンス観、ダンス指導観への影響を考察してみたい。

大正時代は、既に指摘されているように、児童中心の教育の運動が展開され、個の尊重ともに自主、創造の教育が求められた時代であった。しかしこうした「大正デモクラシー」の運動は国家の立場からの統一をめざす政策によって、制約されるようになる。

学校体育においても自発性尊重の体育の発生がみられたが、方法的具全体化され次第に国体擁護と言指導の方針へとかうようになる。

戸倉ハルはこうした学校体育の動向を背景として変動する。

自學自習や自由創造の教育が叫ばれるにつれて、表現の自由を伴う唱歌遊戯が注目されるようになる。

大正14年の学校体育教授要目の改正では、ドイツ系のダンス教材などを加味して、体操の指導法の弾力性が図られ、ダンス教材は行進遊戯に歩法演習（基本の歩法）が加わる発展をみている。唱歌遊戯は、歌詞や歌曲はすべて文部省検定課の唱歌を用い、この限界を守る限り適当なものを選んで指導することができるような柔軟性があった。

昭和にはいるとダンスの教材は、その底にある情操陶冶や自由教育が懸念されるようになり、戦時下では、リズムや美的表現などは過量評価され、音楽遊戯は「伴奏つきの体操」[83]としてようやく認められという状態であった。戸倉はこのような時期に要目の作成委員となっている。

こうした時代を幼児教育に視点を置いてみると、遊戯と訓誨の二元的把握が問題視されている時であった。

倉橋は、その中にあって、幼稚園における子ども集団のもつ教育の独自性を踏まえて、遊戯論を基礎に一元的に論理を展開しようとする姿勢を貫いていると評価されている。

彼の「相互的生存」にみられる保育思想は、自発性の尊重をかかげた自由主義教育思想の反映にみられるよう。

こうした思想が戸倉に与えた影響は、これまでみてきたその指導観の中に明らかにあらわれている。

他方、大正中頃から昭和初年にかけて展開された「児童のための芸術創造と児童自身による芸術的創造活動[84]」であるところの「赤い鳥」運動に代表される芸術自由教育―童話運動に目を移し、その代表者の一人である野口雨情の論と照合すると、雨情は、童話を子供にとって興味の深いもの、永遠に滅しない児童性をもつの、尊い価

---

[82] "「唱歌、行進遊戯の指導に就いて」同上 2 巻 6 号, 昭12.6, p.16.
[84] 日本児童文学学会編「赤い鳥研究」小峰書店, 昭40.4, p.19, 前p. 207 ～ 208 を参考とした.
倉倉のダンス観は，ダンス指導観は，一面にその時代の要求の反映をみせている。戸倉が，1人として研究・教育者の立場にあっただけでなく，1国のこの分野の指導的位置（要目委員等）にあった点からみて，その必然性は推測できるよう。

しかし戸倉の舞踊発想を克明に追っていくと，戸倉は，自然や動物そして人を，深い愛情をもって感情的にとらえていた。しかもそれは深い感傷にとどまらず，より根源的なその本来の姿を洞察しようとするとところから起こっているとくみとられる。

それは，より女性的，感性的な優しい見方で，戸倉独自のダンス観を拓き貫いたことを洞察させるものであろう。

「童心豊か」と評される幼児を対象とした作舞，優美という美的感情をふくらませたより進んだ段階の作品には，独自の作風が貫かれ，学校教育の中のダンス様式に一つの時代を確立したと言えよう。

そのダンス観は，常に教育という立場で語られている。

「是非とも子供を中心とし興味を本位として模倣から創作へ更に創作から創作へ導きたるものである。（略）創作はそのものの価値よりは，むしろ創作に至るまでの過程が大切なのである」

と，作品を真に生きたものとする——即ち，人間の本性をみつつ，各々の好きをいかして，運動的効果をあげ，かつ発達の則にとって心性を成熟することを指導の要請としていた戸倉の指導観をここにうかがい知ることができる。

しかし，感性的な作者は，多くの論を語ってはいない。したがって，残された資料からの読み取りは自ら限界があるろうと思われる。今後，可能な限りの補追を行いたい。


---

85 野口雨情『童心作法問答』尚文堂，大11.1，p.6，尚p.4〜5を参考とした。
86 同上，p.16，尚p.220を参考とした。
87 松本千代栄・安村清美「大正・昭和前期の舞踊教育——『舞踊』から『ダンス』へ——」舞踊学6号，昭58，p.5。
88 戸倉ハレ「幼稚園に於ける唱歌遊戯」p.21，『師範大学講座 体育 第11巻』のうち，建文館，昭11.3.
<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>作品名</th>
<th>対象</th>
<th>曲名</th>
<th>分析</th>
<th>原典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>人形</td>
<td>小</td>
<td>文部省編</td>
<td>104</td>
<td>『唱歌遊戯』音楽書籍 S.26</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>かすす</td>
<td></td>
<td></td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>池の鶴</td>
<td></td>
<td></td>
<td>96</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>雪</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>花と蝶</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>さくら</td>
<td>小・中</td>
<td>西村静香室崎英月</td>
<td>84</td>
<td>『唱歌遊戯』音楽書籍 S.26</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>あられ</td>
<td>小・中</td>
<td>高原しげる樋口信一郎</td>
<td>96</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>どこかで春が</td>
<td>小</td>
<td>村田宗治東川信一郎</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>空の鶴</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>うたうコウ</td>
<td>小</td>
<td>高原しげる小松桂華</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>サガリ</td>
<td></td>
<td></td>
<td>96</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>木の葉</td>
<td>小</td>
<td>古賀一朗樋口信一郎</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>シャボン玉</td>
<td>小</td>
<td>野口雨情中山晋平</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>紅い蝶のポッリ</td>
<td>小</td>
<td>中村雨紅井上武士</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>汽車ぽぽ</td>
<td>小</td>
<td>高原しげる</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>すずめ</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>くくりとりめめ</td>
<td>小</td>
<td>三木薰風</td>
<td>96</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>まっすぐ</td>
<td>小</td>
<td>井上武士</td>
<td>112</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>のぼると見えた</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>風</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>120</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>富士の雪帽子</td>
<td>小</td>
<td>高原しげる</td>
<td>84</td>
<td>『最新学校唱歌遊戯』(井上武士と共著), 日本唱歌出版社 S.68</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>おひとりまつり</td>
<td>小</td>
<td>斎藤治秀</td>
<td>可愛らしく</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>ねむねの眠り</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>梅に霧</td>
<td>小</td>
<td>西村静香</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>山の猿と舞う雀</td>
<td>小</td>
<td>野口雨情</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>いちばん蝉</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>ひばり</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>120</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>ぱらぱら小雨</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>草の芽</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>春は春でも</td>
<td>小</td>
<td>久保田俊二</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>愛をそぎる</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>春の月</td>
<td>小</td>
<td>西村静香</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
<td>かみなり</td>
<td>小</td>
<td>飯田亀代</td>
<td>112</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>34</td>
<td>夏がいっぱい</td>
<td>小</td>
<td>池田広介</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
<td>ハブラ</td>
<td>小</td>
<td>井上武士</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>36</td>
<td>うずづき</td>
<td>小</td>
<td>重原義徳</td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>37</td>
<td>月夜</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>38</td>
<td>こころこ娃</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>84</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>39</td>
<td>魚</td>
<td>小</td>
<td>文部省唱歌</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>40</td>
<td>月夜</td>
<td>小</td>
<td>文部省唱歌</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>41</td>
<td>魚</td>
<td>小</td>
<td>文部省唱歌</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>42</td>
<td>インザヴェイブス</td>
<td>小</td>
<td>文部省唱歌</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>43</td>
<td>ポピー</td>
<td>小</td>
<td>文部省唱歌</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>44</td>
<td>田畑の月</td>
<td>小</td>
<td>イバソビッチ</td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>45</td>
<td>鳥</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>46</td>
<td>桚藤</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>47</td>
<td>ゆりかご</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>48</td>
<td>密枝</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>49</td>
<td>鳥の羽</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>50</td>
<td>燃火</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>51</td>
<td>花すられ</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>52</td>
<td>燃火</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>53</td>
<td>水師宮の会見</td>
<td>小</td>
<td></td>
<td>72</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

-24-
<table>
<thead>
<tr>
<th>作品名</th>
<th>対象</th>
<th>歌曲</th>
<th>時間</th>
<th>分析</th>
<th>原典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ねんどのあそび</td>
<td>幼児</td>
<td>倉橋 慎三</td>
<td>中山 賢平</td>
<td>明ルック探uetト</td>
<td>82</td>
</tr>
<tr>
<td>ほっとたつけた</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「幼稚園の教育」 1]</td>
</tr>
<tr>
<td>あのり</td>
<td>中・高</td>
<td>下種 哲一</td>
<td>100</td>
<td>2</td>
<td>[「学校体育」2巻9号</td>
</tr>
<tr>
<td>月見草</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>1</td>
<td>[「運動会のダンス指導」 1]</td>
</tr>
<tr>
<td>くまの動き</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>3</td>
<td>[「体育会科学」4巻7号</td>
</tr>
<tr>
<td>追風</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「体育会科学」4巻4号</td>
</tr>
<tr>
<td>花の雨かた</td>
<td>小</td>
<td>わらべうた</td>
<td>読本 唱歌</td>
<td>1</td>
<td>[「春をたたえて」 2]</td>
</tr>
<tr>
<td>春が来た</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>3</td>
<td>[「体育会科学」4巻5号</td>
</tr>
<tr>
<td>花のトネル</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「体育会科学」4巻5号</td>
</tr>
<tr>
<td>お・スパンナ</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>8</td>
<td>[「体育会科学」4巻7号</td>
</tr>
<tr>
<td>銀波 -- 中学校用 --</td>
<td>中・高</td>
<td>ワイマン</td>
<td>ドヴォルザーク</td>
<td>1</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>池の鳥</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>乙女の祈り</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>月の砂漠</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>育芽の地</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>マスカ</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>別れのワルツ</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>花の雪</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>さくら踏舞曲</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>フラワーライフ</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>美しく青きドナウ</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>月の花</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>田舎の月</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>早春の月</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>八段甲せて</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>赤いぼう</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>菊の月幻想</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
<tr>
<td>高野の春</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>&quot;</td>
<td>2</td>
<td>[「学校ダンス作成集」新潮社</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 歌曲の欄の○印は、童謡詩人会に所蔵していたことを示す。童謡詩人会「日本童謡集」新潮社 | A.5.1。他に『海の月』(「形式から内容へ」) | 女子と子供の体育3巻1号 | 昭和13.1 | p.10-12 | 1) | 対象とした。 |
<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>教材名</th>
<th>対象</th>
<th>解説内容</th>
<th>原典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>17</td>
<td>家庭の部</td>
<td>入学3号</td>
<td>指導計画</td>
<td>「女子と子供の体育」3巻9号 p.46-52 S.13.9</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>兵隊遊戯</td>
<td>10号</td>
<td>指導の実際（過程）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>雪</td>
<td>4巻2号</td>
<td>指導計画</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>月の砂漠</td>
<td>指導の実際（過程）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>雪月夜</td>
<td>指導精神・注意</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>シーパーの第三の役</td>
<td>指導の実際（過程）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>汽車</td>
<td>時間配当・指導の（例・注意）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>ヴィンヤード</td>
<td>指導計画（注意）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>菊</td>
<td>指導計画・注意</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>旭日町</td>
<td>時間配当</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>朝と花</td>
<td>動作・時間配当・指導経過</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>春の小川</td>
<td>指導計画（動作・注意）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>菊</td>
<td>指導計画・注意</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>ワルツステップ</td>
<td>方法</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>ネットスティップ</td>
<td>動作の指導</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>シーパーの発展的指導</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
<td>ゆがたこや</td>
<td>幼児</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

資料3－1 ポーズにみる舞踊表現特性

- 月の砂漠 (昭26～30)
- 青葉の笛 (昭26～30)
- さくら変奏曲 (昭31～35)
- 別れのワルツ (昭21～25)
- 肖待草幻想曲 (昭31～35)

資料3－2 写真の重ね図にみる舞踊表現特性

(1) 幼稚園・小学校 『唱歌遊戯』より
- 人形 (大15～昭10)
- 池の鯉 (昭26～30)
- 雪 (昭26～30)
- 浜干鳥 (昭21～25)
- ユーモレスク (昭21～25)

資料4 指導法分析

注：印は教師の指導、印は児童の反応を示す。但し主に教師の指導を中心に引用した。

資料4－1（指導法分析番号4 p.31～34）
指導法例(1) 「花」 (低学年)
(指導の過程)
○ 今週は山も花もいろいろな花が咲いて大変
○ どなたもお客様のお客様ですか。
△ いろいろな客の中でチューリップが一番多かった。
○ それでどうなんだも自分の好きな花になっていい
○ 今日はいい。あの綺麗な花が小さい細かい種
○ これからから種子を播きますよ。種子を
○ 今度はお水をやりますよ。

-26-
元気な青々とした芽が出ました。
花が咲くやすに大きくなりました。
何時のかに芽が出来ました。

綺麗な花があちこちに咲き出しました。
何と綺麗な花でせう。黄や、緑、赤や。
あんまり美しいので蝶々が見つけて飛んできました。
皆さん今度は蝶々になりましょう。

この時鳥の飛ぶような表現が多いので、蝶の舞
ぶ姿を相互に研究させる。
一人一人に向かせ。共同批正をする。
静かにひららに舞ぶ姿を練習させる。
皆な癒くなって可愛いらしい。

資料４－２（指導法分析番号9　p.15～16, 19）
指導法例2）「案山子」（尋2）
第1時
目的　既習唱歌「案山子」として進行の持
って来る概念を快活無邪気と表現させる。

指導経過
△　先生今日は何をしますか。鬼ごっこをさして
下さい。帽子取りをやらせて下さい……。
いろいろな要求がある。
皆元気でいいくこと、さあこれから気持よく体操
をやりましょう。

簡単な教材に依って身体各部を練習させる。
今度は愉快に元気で歩いてみましょう。歩いてい
るうちに1列円形を作らせる。手をつないだま
ま右に駆けたり左に駆けたりして一通りの準備
運動が終る。

この間上手に歌っていた「案山子」をここで歌っ
て下さい。

案山子についての質問をする。
△２，３の児童に発表させる。
今度は案山子になって歌って下さい。

先生と御一緒に手を拍って歌いましょう。

更にいろいろな質問に依って動作の誘導に努め、
児童の表現を批正しながら次の動作をする。

（略）

初めからつづけて独りでやってごらんなさい。
次第に批正した動作に近く。

御一緒に歌いながらやりましょう。

大体動作も気分も出来た。

資料４－３（指導法分析番号15　p.26～28）
指導法例3）「海」（尋5・6）

指導目的　波の動作によって海の景色を優美に表
現させ、動作の美的訓練をする。

指導計画　第1時　海の曲によってステップ練習

2　基本ステップに臀の動作を結

3　総括的取扱(1)

4　（2）

5　練習的取扱

資料４－４（指導法分析番号25　p.45～49）
指導法例4）「潮」

指導計画　第1時　曲の理解と主要ステップの結

2　詩の吟味と主要ステップの反

3　動作の部分指導から遠まで

4　1番の復習と、2番の新授

5　反復練習と鑑賞

資料４－５（指導法分析番号33　p.8～9）

指導法例5）「夕やけやこや」

動作　
ゆけやこや

拍手しながら駆足で任意の方向へ進み誰かと向
向き合ふ

あしたてんきになれ

両手をとりあって駆足築路で背中合せに其の連
手をくぐる

以上の動作を繰返して行ふ取扱の方法

かうした情景とその心情をピアノに表して指導したいと思う。

先づ音に合わせてくかかりへし、くりかへし行は
せる。

次第に音の弱強をそのまま動作に移して遠近
を表現させめる。即ちオクターブの力強い音
で奏する時には、子供等は駆足も大きく、歌声
も拍手を元気に生き生きと動作し、次音を弱
め、やがては旋律を一音で微かに奏する時には、
歌声も足音も拍手もしのびやかに動作する。

かうして音と動作をと混然と一致させていく
と、この簡単な遊びも興味が津々としてつきな
いものになっている。